

鳥をとる法

やまとの翁

しかど、受合ふことは出来ないが、翁が、まだ幼なかつたころ、人から授かつた鳥取の法といふのを、一つ御傳習しませうか。

それは、つまり、暗こうなので。鳥といふものは、鳥のうちでも、よほどかしこくて、なかく、鐵砲などでとることが六かし、それで、まづ方のつよい牛の尾の先へ二十ポンドばかりの鐵のダムベルを、ひすびつけて、それから、その脊なかへ赤紙のきれを、少ばかり、張りつけて、そこで、この牛を野原へ、つれ出して草を喰はしておくのです。

すると、野原には、例の鳥が、幾匹となく飛んで居るのですが、牛は、ひとつとして草を喰つて居ります。忽ち、一羽の鳥が、牛の脊なかの赤紙を見つける。所が、こ

れが鳥の目には、ちようど牛の肉が出てゐるかの様に見える、鳥は、例の通り肉なすが、大好物ですから、これは、甘い御馳走だといふので、すぐとんで来て、牛の脊なかへ、どまつて、無暗に、つゝきたすのです。そうなると、牛の方では、くすぐつたくて、仕方がありませんから、今まで、たれて居つた尾をふりあげて脊中を拂ふ、すると尾のさきには、例の二十ポンドの重さの鐵のダムベルが、くつゝいていますから堪らない。鳥は、これで以てなぐりおとされて、忽死んでころげおちて來ます。

こういふぐあい、鳥がなん羽でも、とれるといふのですが、翁も聞いた丈で、まだ實際ためして見たことはないんですから、始にもうした通り、しかど受け合ふことの出来ないのは、残念です。

そこで、も一つ鳥どりの法を聞いていいますが、も

ちろん、これも取れそーにはないんですが、序ですか
らお話だけしておきませう。それは、つまり、こうい
ふんです。

まづ、夏の炎天に、濱邊へ、出まして丸裸になつて、
半身を砂の中へ埋めて、仰ひけになつて兩手を頭の上
に押しつけて單衣をひろげてつかんで居るのです。ごぞん
じの通り鳥は人の死骸なごが、大變に好物なんです
からこれを見るや否や、死骸だと思つて、幾匹となく、
眞黒になつて、飛び集つて来て身體をつゝきに來ま
す、すこしは、いたい、くすぐつたいでせうけれど
も、暫しんぼーして居つて、いゝ時分を見計らつて、
兩手で以て、不意に頭の上から、單衣をかぶせかける、
すると鳥は、もどく死體だと思つて油断しておつた
のですから、堪らない。すくなくとも、五六羽は、伏
せて取ることが出来るといふのですが、實際はどうで

すか。

考へもの

(一) さつね上下をぬいで、おどれば、ひじなも、上下を
ぬぐ。(植物の名一つ)

さつね上下をぬぐと、つ、夫がおどると、つゝ、ひ
じなが上下をぬぐと、じ。それで答は、つゝじ(躑

躑)

前號むちなどせるは活字の誤につき訂止す。

いろは謎の二三

(一) いの字どかけて

(二) ろの字どかけて

(三) はの字どかけて

なんとく。